



# 自転車の駅



川崎ゆきお

「間が持たんねえ」

「そうですねあ」

いつもの自転車の駅での会話だ。

自転車の駅とは、自転車散歩をやっている人が集まる場所。ただ、サイクリングというほどのものではなく、町内をうろうろしている連中だ。中高年の男性が多い。多いと言っても四五人だろうか。

その駅は神社前で、方々に道が延びている。昔の村道のターミナルのようなものだ。バスなら確実にここはターミナル駅になるのだが、その規模ではない。

「何か趣味が必要なんじゃないですかね。こうして自転車で走っていても、ぼんやりその辺りを見ているだけです。これは何か無駄を無駄として楽しむ程度ですからねえ」

「ライフワークが必要なのでは」

「ワークですか」

「まあ、仕事のようなものです。儲からなくてもいいし、世の中に貢献出来なくてもいい。要はやることがないから、何か目的を持ち、それを実践する作業行為がないと間が持たない。そういうことですよ」

「そうそう」

「ここで、こうしてお喋りをやっているのもいいですが、生産性がありません。何となく不満に思っているのは、それなんですなあ。散歩なんて息抜きですよ。抜きっぱなしじゃないですか。何かをやっている最中、一寸の休憩が息抜きなんだな」

「そうそう、その通り。物足りないんですよ」

「だから、ライフワークなんだ。ワークが必要なんだ」

「ありますか」

「あらいでかい」

「ほう、それは何でしょう」

「それを考えながら、自転車でうろうろしておる」

「じゃ、ないんですね」

「考えておることが、即実践じゃ」

「考えているだけじゃ実践じゃないでしょ」

「いきなり実践に進めんじゃろ。何を実践するのか、何を仕事にするのかを先ずは考えないと駄目じゃないか」

「ああ、なるほど、それでいい知恵は出ましたか」

「最中じゃ」

「長いですよね」

「何個かは出たのじゃが、今一つでなあ」

「ライフワークって、地味な作業だと思いますが、どうですか」

「だから、畑でもあれば耕すし、山持ちなら山の手入れや、山の幸を採取する。川があれば、川魚を釣る。こういうのは特に考えなくても即実践じゃ。ところが、ここは町。そういうわけにはいかん」

「いっそ、田舎へ引っ越されてはいかがですか」

「それはそれで寂しい」

「なるほど」

「おっと、長話がすぎた。自転車で走りながら、ライフワークネタを考えるとするよ」

「じゃ、仕事じゃないですか。それは」

「そうだよ。ぼんやり走っているわけじゃない。作業中なんだ」

「じゃ、行ってらっしゃい」

「ああ」

実は、この自転車の駅がライフワークなのかもしれない。

了